

令和7年

8月の重要農作業

四国中央市農業振興センター

《問い合わせ先》

四国中央農業指導班

(畜産) 東予家畜保健衛生所

TEL 23-2394

TEL (0897) 57-9122

【熱中症対策】

～予防のポイント～

高温時の作業は極力避け、日陰や風通しのよい場所で作業するとともに、できるだけ単独作業は避けましょう。また、喉の渇きを感じる前にこまめに水分・塩分補給し、熱中症対策アイテムを活用しましょう。

～熱中症が疑われる場合～

涼しい環境へ避難し、水分・塩分を補給してください。応急処置をしても症状が改善しない場合は医療機関で診療を受けましょう。

【作物】

1 品種・田植期別の穂肥施用時期（出穂期・成熟期は目安）

品種名	田植期	穂肥(出穂20日前)		出穂期	成熟期
		化成444 又はNK特11号	施用量 (10a)		
きぬむすめ	6/1	7/26頃	30kg	8/15頃	9/22頃
	6/10	7/28頃	30kg	8/17頃	9/24頃
ヒノヒカリ	6/1	8/1頃	30kg	8/21頃	9/29頃
	6/10	8/5頃	30kg	8/25頃	10/5頃
にこまる	6/5	8/7頃	30kg	8/27頃	10/7頃
	6/15	8/10頃	30kg	8/30頃	10/12頃
松山三井	6/10	8/10頃	30kg	8/30頃	10/16頃
	6/20	8/15頃	30kg	9/4頃	10/20頃

2 水管理について

- 中干し直後：2～3回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
- 幼穂形成期（出穂25日前）～穂ばらみ期：土壤水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
- 出穂期～出穂期以降：浅水管理（2～3cm）をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
- 登熟期：灌水して土壤に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度（飽水状態）にします。
- 落水期：落水期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壤水分を保ちます。

3 病害虫防除について

防除時期	病害虫名	農薬名 散布濃度・使用量 使用時期
8月中旬～8月下旬 (出穂期前)	カメムシ類・ツマグロヨコバイ・コブノメイガ・イナゴ類・ウンカ類・紋枯病・もみ枯細菌病・いもち病・ごま葉枯病・内穎褐変病・稲こうじ病	トレポンスターフロアブル (1,000倍 収穫14日前まで) + バリダシン液剤5 (1,000倍 収穫14日前まで) + ブラシフロアブル (1,000倍 収穫7日前まで) (粉剤の場合：イッカツエース粉剤DL 3～4kg/10a、穂揃期まで)
8月下旬～ (穂揃期～傾穂期)	カメムシ類 (ウンカ類、ツマグロヨコバイにも有効)	スタークル顆粒水溶剤 (2,000倍 収穫7日前まで)

- 稲こうじ病は、前年度多発した圃場では菌密度が高いため再発の可能性があります。出穂20～15日前にドイツボルドーA2,000倍（出穂10日前まで）を予防散布してください。他剤との混用はできません。
- カメムシ対策として、ほ場周辺の草刈りを行ってください。出穂3週間前と出穂時に2回実施すると効果的です。乳熟期から糊熟期が最も被害が大きく、この時期に当たる出穂10～15日後に防除を実施してください。
- トレポンスターフロアブルとスタークル顆粒水溶剤の使用回数は、合わせて3回以内となっています。 <松本>

【野菜】

1 さといも

(1) 病害虫防除

ア 疫病

8月は、子芋の肥大、孫芋の着生、その後成熟期を迎えるため感染しやすく、台風の襲来等による長時間の降雨により発生が拡大します。台風、長雨後は、「ダイナモ顆粒水和剤:2,000倍」を散布し、降雨が続く場合は「ピシロックフロアブル:1,000倍」を散布【菌生菌対策】してください。さといもは散布薬剤が付着しにくいため、スカッシュ2,000倍もしくは、まくびか10,000倍を加用してください。また、葉害を軽減するため、土壤水分や生育状況を観察し、灌水後夕方防除してください。

農薬名	病害名	散布濃度	収穫前日数/使用回数	特徴
ダイナモ顆粒水和剤	疫病	2,000倍	収穫21日前まで/3回	予防及び治療効果がある。感染直後でも、病期の蔓延を阻止。高温多湿時葉害を生じる場合がある。
カンパネラ水和剤	疫病	1,000倍	収穫7日前まで/2回	治療効果があり、進達性と浸透移行性がある。使用回数は、ペンコゼブ水和剤と合わせて2回以内とする。

イ ハダニ類

発生初期にグレーシア乳剤2,000倍(収穫7日/2回)、マイトコーネフロアブル1,000倍(収穫3日前/1回)で防除してください。

ウ ハスモンヨトウ

8月は多発するため、発生初期にグレーシア乳剤2,000倍(収穫7日/2回)、またはプレバソフロアブル5 2,000倍(収穫前日/3回)、またはマトリックフロアブル2,000倍(収穫7日前/3回)で防除してください。

(2) 水管理と追肥

ア 全期マルチ栽培は、晴天が続く場合畝間の土の状態や生育状況をよく観察して灌水してください。

イ 日中、溝に水が溜まったままの状態では、水の温度が上がり根傷みの原因となりますので、夕方の灌水に努め、日中には停滞水が残らないよう注意してください。

ウ 露地栽培（化成体系）は、8月上旬及び中旬に「化成444」を40kg/10a施用してください。 <徳永>

2 やまのいも

(1) 追肥と水管理

一般体系では8月上旬に、MB粒状固形を80kg/10a施用します。この最終追肥が遅れると、芋の形状の乱れが心配されるので注意してください。

開花後、栄養生長（茎葉繁茂期）から生殖生長（新芋肥大期）に移行し、吸肥力も8月上旬～9月にかけて最大となります。土壤水分のムラ（乾湿の差）をなくすため、生育後半まで定期的な灌水を行い適湿を保つようにします。

(2) 病害虫防除

防除時期	対象病害虫名	農薬名	散布濃度	収穫前日数/使用回数
7月下旬～8月上旬	ハダニ類	コロマイト乳剤	1,000倍	7日前/2回
	炭そ病	ペンコゼブ水和剤	600倍	21日前/4回
8月中～下旬	ハスモンヨトウ、カイツコガ	プレバソフロアブル5	2,000倍	前日/3回
	ハダニ類	マイトコーネフロアブル	1,000倍	3日前/1回
	カイツコガ	アタゴ乳剤	2,000倍	7日前/3回
	炭そ病	ペンコゼブ水和剤	600倍	21日前/4回

※台風、雷雨の後はアタゴ20フロアブル2,000倍(前日/3回)で防除してください。 <三谷>

【果樹】

1 摘果

着果量に応じた摘果を行い、目標とする大きさの高品質な果実の生産と来年の着花確保を図ります。

(1) 温州みかん

着果量が多く樹勢低下が心配される樹は、先月に全摘果を行った樹冠上部以外の着果部の摘果を始めてください。

着果と新梢発生のバランスがよい樹は、9月以降に重点を置いた後期摘果を行い、着果ストレスによる果実品質の向上に努めます。

樹冠上部を摘果して夏芽を発生させた樹は、エカキムシ（ミカンハモグリガ）の防除を徹底して、健全な結果母枝を確保します。

(2) 中晩柑類

着果量の多い樹は、早急に摘果を行い樹勢維持と果実肥大の促進に努めてください。仕上げ摘果は、8月上旬頃までに完了してください。

2 灌水

土壤の過乾燥は、果実の生育阻害（小玉果、酸高果実）や樹勢低下を助長するので、適切に灌水を行います。

温州みかんは、葉の巻き具合（葉の萎凋が朝になっても戻らない）、旧葉の落葉状況等をみながら、7日間隔で10～20mm（10～20t/10a）を目安に灌水して、適度な水分ストレスを維持します。

中晩柑類は、高温、土壤乾燥が続けば7日間隔で20～30mm（20～30t/10a）を目安に灌水を行ってください。

3 病害虫防除

黒点病防除は、前回散布後の累積降水量200～250mmまたは30日の間隔で定期的に薬剤散布してください。本病に弱い品種（せとか、清見等）は、散布間隔を短くします。また、伝染源となる枯れ枝は除去してください。 <三谷>

【シキミ】

1 病害虫防除

高温期に多発する病害虫の適期防除を徹底し、お彼岸出荷に備えます。防除は高温時を避けて涼しい時間帯に実施し、薬剤が葉裏にかかるよう、丁寧に散布してください。

対象病害虫名	農薬名	散布濃度	使用時期/使用回数
クスアアナキジウムシ	コテツフロアブル	2,000倍	発生初期/2回以内
ゲンバイムシ類	モスピラン顆粒水溶剤	2,000倍	発生初期/5回以内
サビダニ類	ピラニカEW	1,000倍	発生初期/2回以内
ケムシ類	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	発生初期/5回以内
うどんこ病、炭疽病、輪紋葉枯病	トップジンM水和剤	1,000倍	発病初期/5回以内

2 下枝の整理

株元の古枝や細い下枝が込み合ってくると、病害が蔓延したり、防除作業がやりにくくなったりします。また、収穫枝の伸張が悪くなるので、適宜切除して風通しを良くしてください。

3 荷造り

採取した切り枝は、病害葉や古葉、実などを取り除き、出荷先の規格に合わせて輪ゴムや紐で元を揃えて束ね、日陰で10時間以上水揚げをしてください。 <佐津間>

【畜産】

(ハエ対策)

ハエの発生は6～7月にピークとなり、8月に若干減少し、秋口に再び増加します。ハエは通常約2週間で卵から成虫となりますが、気温が高くなると成虫になるまでの日数が短くなり、約1週間で成虫になります。成虫になると1～2か月生存し、1回につき50～150個の卵を5～10回産卵します。①環境対策と②薬剤による殺虫が効果的なハエ対策とされています。特に、②薬剤による殺虫では、卵、幼虫への対策が効果的です。

①環境対策	<ul style="list-style-type: none"> こまめな除ふん、清掃、残餌の除去 畜舎内の風通しをよくする、水漏れ場所の修理等により乾燥状態を保つ ふんは発酵、乾燥させ、ウジを死滅させる（発酵温度60℃以上とする）
②薬剤による殺虫	<p><卵・幼虫対策></p> <ul style="list-style-type: none"> 糞や堆肥等のうじの発生場所に、脱皮阻害剤（IGR剤等）を散布 <p><成虫対策></p> <ul style="list-style-type: none"> ハエ取紙、殺虫剤（成虫用） 食毒系薬剤と誘引剤（砂糖、酒等）を混ぜ、ハエの好んで止まる場所（天井、壁等）に設置または塗布

<織田>